

2018岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第50回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

永く永く続けたい

田房正子

ワタシには日々やつていいことがある
一番長くやつていいのは「娘」

もうベテランの娘である

ベテランでもわからないことが何かと多く
でもベテランゆえに素直に尋ねられず

それを見抜きひょいと出してくれる

母の手に思いつき甘えている毎日

次は「事務員さん」

任せてもらえるお仕事があるということは

ありがたくうれしい

キリッとシャープにとはいかなくとも

誠実に誠実に全うしたい

そして次は「奥さん」

ウチの夫はああ見えて意外に

「ありがとう」をよく言つてくれる

言われて当然の時は「だよね」と思い

そうでない時はいきさかこそばゆい

そして次は「母さん」

這えば立て立てば歩めの親心の頃を経て

大学生ともなればもう一丁前で

娘一人を相手に日夜ガールズトークが続く

ちょっと辛口でスペースが効いていて

はじけるトークが面白くてたまらない

そして

ワタシのもくろみはさらに続く

この先やつてみたいことは「お姑さん」

『娘ムコ』つて悪くない響きではないか

そして「おばあちゃん」

孫とはどれほど可愛いものであろうか

次々とやつてみたいことは増えていく

そしてどれもみんな失うことなく

全部全部続けたい

母がいてくれるから「娘」でいられ

夫がいてくれるから「奥さん」でいられ

娘たちがいてくれるから「母さん」でいられ

家族の協力があるからお勤めにも出られる

みんながいるつてシアワセなことだ

誰が欠けても成立しない

この毎日のシアワセを

永く永く続けたい

鬼頭村

きとうむら

山本照子

私の古里である、鬼頭村には、くねくねと流れている谷川があつて、それに沿つて二十三軒の家が建てられている。

村には樹齢五百年の大イチヨウがある。その樹を鬼頭村の守り神と崇めている村人たちは、今でも根元に飯と水を供える。飯をついばみにくる小鳥の泣き声は天地に満ちて、村の永遠の平和を約束してくれるのだ。

終戦直後の鬼頭村には、因習が色濃く残されていた。その一つが、左利きの女の子は、早逝すると言うものだつた。そして私は、左利きの女の子として生まれた。

「原田の家系には、左利きの血は流れとらんのじやあ、どんなことをしても、右利きに育てんといけんぞな」物心ついた頃から、母を叱る祖母の声を何度も聞いたことだらう。

三、四歳の私が左手に箸を持つとき、素早く母の拳骨が左手に落ちてくる。私はあまりの痛さに泣きわめいた。泣きやむのを気長に待つた母は、私の耳元で「春子には長生きしてもらわんと困るから」とささやくと、鎧びのついた緑色の茶筒から、赤色の大きな飴玉を取りだすと、私の右手に握らせた。そのあと、母は両手で、私の左手を包み込んでくれるのだった。

今では鬼頭村でも、その付近の村でも、左利きは個性のひとつとして認められ、矯正する親はほとんどない。七十年前に、私を右利きに育てた母は、五十三歳で死んだ。その後「私の居場所はここしかない」と言わんばかりに、私の右手に棲むようになった。

そして、鬼頭村の、喧噪にも似た夕焼けの華々しさや、夏祭りの夜店に漂つっていたアセチレンガスの匂いについて語るのだ。

私が右利きに育てあげた苦労は、「お互いによう分かつとるじやろう。とにかく私は、春子の右手が居心地ええんよ」とでも思つているのかどうか、何も話さない。

最近母は、ますます饒舌になってきた。

手をつなぐ

三木 茂登子

「ドドンドン・ドドンドン」
「わっしょい・わっしょい」
弾けるような子どもたちの声

今日は保育園の夏祭り

二人の孫が 十五年前に通った保育園の
その孫がいま 大学生と高校生に

昔のまんまの夏祭り

手づくりの大きな紙のみこし

梶子の実で染めた揃いのTシャツ
頭に結んだ鉢巻きに したたる汗が

会場の公園を目指して列は続く

ハヤシライス カレーライス かき氷
食券を求める人の長蛇の列
あつという間に 売り切れの赤い札

会場の隅に作られた お化け屋敷
闇の中から「ドロン・ドロン・ドロン」
「ウツ・キヤー・コワイヨ・タスケテ」
黄色の悲鳴がとどろく

会場の真ん中に どつしり作られた土俵
タオルの輝をしめた 豆力士が睨み合う

行司の大きな团扇が上がる

「ハツケヨイ・ハツケヨイヨイ」

睨み合う豆力士の黒い顔に滝の汗

先生のマイクの声に
怒どうのよう人が集まる

花火が始まる

園児の若いお父さんが火をつけていく
「パ・シユシユ・ポーン・ヒューン」

空に向かつて次々と

赤い玉白い玉となつて飛んでいく
両手を上げて追つかける園児

幼になつて 祭りの夜に手をつなぐ
右の手に左の手に
いつもつないだ手をつなぐ

漂う一日

朝刊を取るためには 痛む脚で門まで数歩
門の外を眺めれば さらに遠い世界
老翁がこの門を出るのは
週に一日のごみ捨てのとき

浅い眠りのあと

老翁は 血圧計の帶を腕に巻く
数値は 上がつたり 下がつたり
血圧計の気分次第
計測は 日に何度も引く みくじである

浅い眠りのあと

老翁の思い出が 懐から出でくる
ひとつ ふたつ みつつ よつつ いつつ
ぐるぐる お手玉が始まる
一度にたくさん来られても面倒だ
老翁は懐に ふたつ押し戻す

浅い眠りのあと

老翁は 洗濯物をたたむ
化纖のシャツに毛玉が目立つ
老翁をして一層老たらしむるものは
この毛玉である
糸切り鉄を握る指先に 力がこもる

浅い眠りの中

老翁のまぶたの裏に 磁盤が現れる
直線が伸びて 交差する群青の空
白石 黒石 交互に増えて陣地を広げる
次第に眠りが深くなる老翁

満天の碁石たちにも 器に戻るときが来る
器の中で 各々がぶつかるその音は
念佛を唱える声に似てはいなか

意識は 海の底から浮いてくるように
老翁は浅い眠りに戻る
閉じたまぶたの裏で
右足の靴下の綻びが 気にかかる

まがりかど

生
力
縫

凜

あるいは きて まつすぐに
それが もとめられたこと

まがりかど まがつてみたかった
そうしなかつたのはこわかつたから
まつすぐにあるいていたら
すべてが わかりやすかつた
じょうぎで はかつたように

だけどほんとうは
まがりかどをまがつてみたい と
おもつていた

きれいで いようと

まぶたに いろをのせていた
ちいさなくちびるにも
かかるいべにをのせていた

それは ふいに やつてきて
ねがつたうつくしきをうばう
おちぶれたくなくて
いふくも はだも かざつた
うばわれてきづく
うつくしきに きづく

どろのうみにおよいで
みちのくさをはんで
しにものぐるいのすがたこそが ああ

まがりかどをまがつてみたかった
なにがあるのか
まがつてみよう とおくにみえるあの
あの まがりかど

【短歌】

◎岡山市長賞

「加齢です」パソコン画面に向けて言ふ医師の横顔にほくろが一つ

竹本 喜子

◇岡山市教育委員会教育長賞

病室の夜は深まり父は問ふ「寒くはないか」いくたび幾度も問ふ

信安 淳子

お隣りもそのお隣りも灯がひとつそして平成間もなく閉じる

長森 正子

マンドリン抱えて微笑む写真のあり私の知らない亡母の青春

若林 とし子

田植機に「任せとけん」と田の隅で手植えする義母九十五歳

佐藤 鈴枝

【俳句】

◎岡山市長賞

押入の奥の木函や修司の忌

小西 瞬夏

◇岡山市教育委員会教育長賞

渡さるる赤子ずつしり豊の秋

時松 明

小屋一つありて整ふ植田かな

小橋 さちえ

沢蟹と風の行き交ふ通し土間

栗原員江

黒髪のほかは捨てたる涼しさよ

渡辺 悅古

【川柳】

◎岡山市長賞

帰るなら来るなど泣いた母だった

野島 全

◇岡山市教育委員会教育長賞

八起き日は古里と決め洗う墓

堀田 光美

瓶の中昨日をも一度振つてみる

真神 昌子

こぼれ種仮設の庭に咲きました

長島 恵美子

虫喰いの記憶にひとつ点る朱

難波 桂子

【隨筆】

◎岡山市長賞

記憶の場所

佐藤陽子

私の車は一体どこへ行つたのだ？

自宅の裏門を開けた横に駐車場がある。いつも、そこにあるはずの車がない。

盗まれた。

すぐに警察に連絡をしなければならない。しかし私はすぐへ急いでいた。とにかく、すぐに出かけなくてはいけない。約束に間に合うギリギリの時間だ。

タクシーを呼ぼう。

警察には用事が済んだ後に連絡をすればいい。無いものは無いのだから。警察が来たらそれこそ時間がかかる。調書というやつだ。

「車種はなんですか？」から始まり「免許証を拝見します」になり「最後はいつ、ここに車を止めましたか？」となるだろう。か？いつ車を止めたのだろう。記憶がない。「記憶にございません」。

国の偉い人達も、こんな風に記憶がなくなるのだろうか。

いや、そうではないらしい。国会中継でよく聞く「記憶にございません」は眞実を言えば問題になるし、そつかといつて嘘はつけない。そんな時に使う便利な官僚言葉だという。

ならば「記憶の場所」がきちんと存在していて、そこには眞実が整頓されて並んでいるはずだ。

私の車も「記憶の場所」にあるかもしれない。

そういうえば、以前にも車で困つたことがあつた。

会社の帰りにスーパー・マーケットに寄つた時のことだ。買物を終え、車をバックして駐車場を出ようとしたが、車をバックする方法が急に分からなくなつた。

今さつき会社の駐車場をバックして来たばかりなのに、なんとしたことか。気分が一瞬で引潮状態になつた。と同時に疲れていることを体がじんわりと思い出した。

その月は残業がすでに三〇時間も超えていた。この日も長時間のパソコン作業で目の奥がやられていた。限界だつたのか、目が勝手に閉じていた。結局、ほんの少し仮眠を取つただけで駐車場から脱出できた。記憶は滅多にめげたりはしない。

だから冷静になろう。

昨日は岡山駅近くで友達とランチをするために車で出かけた。その後、自宅から徒步一分のスーパー・マーケットに寄つて帰宅した。近いので普段は歩いて買物に行つてゐる。

もしや車を置いたまま歩いて帰つたのか？

可能性がなくもない。

車がそこにありさえすれば、警察やタクシーのお世話にならず、しかも遅刻も回避できる。すべて解決する。記憶が怪しいのを除けばだけど。

ドキドキしながらスーパー・マーケットに急いだ。ほら、ちゃんと私の車があつた！

凍てつく夜に

岡 由美子

肌を突き刺すような寒波が襲来した日の午後、実家を訪れた。父亡き後、週に一度のペースで母を訪ねるのが習慣となつて、七年を迎えるとしている。岡山県の北東部に位置する実家は、私の住んでいる岡山市南部よりも、一度ぐらい気温が低い。車のドアを開けた途端、強烈な冷気が私を包んだ。

車の音を聞きつけ、家の中から飛び出てきた母が、困りきった表情で私に告げた。

「さつきなあ、水道管が破裂したんよ。元栓を止めたから、今日は水道の水が一滴も出んのよ。あんたがせつかく来てくれたのに、悪いなあ・・・」

修理の業者は、明日来てくれるのだという。

早速トイレに行つたが、水が流れない。手も洗えない。水のありがたさを思い知らされた。明日の朝まで、ポット一本の湯と風呂の残り湯とだけで、急場をしのがなければならない。簡単な夕食を済ませ、一杯のお茶を一口一口大切に飲んだ。勿論お風呂も沸かせないので、私は着替えも洗顔もせず、応接間のソファーの長椅子で寝ることにした。外は深々と冷え込んでいるが、室内はエアコンと電気ストーブとで、寒さ知らずである。私は、厚手の毛布一枚を掛け、横になつた。

しばらくして、母が大布団を抱えて入つてきた。「こんな所で寝て、風を引いてはいけないからお掛けなさい」と言う。二部屋を隔てた押し入れから、九十五歳の母が大布団を持つてきただことに驚き、思わず母をたしなめた「重たい布団を運んで、転んだらどうするん。私は寒うないから、心配いらんよ」

母は、おぼつかない足取りで退室した。

ウトウトしていると、また母の気配がした。今度は毛布を持ってきて、私の足元に掛けて出て行つた。明け方、トイレで目が覚めた時、さらに一枚、肌掛け布団が掛けてあるのに気づいた。いつの間に掛けてくれたのだろう・・・。

六時過ぎには、もう母が起きてきて、開口一番に尋ねた。「寒うなかつたかな。ゆうべはものすごく冷えたなあ」

母の掛けてくれた寝具を押し入れにしまつた。大布団、毛布、肌掛け布団。それらは結構重く、押し入れまでの距離も長い。ソファで寝ている娘が、寒くはないか、風を引きはしないかと案じて眠られず、何度も寝具を運んだ母の心中を思い、胸が痛くなつた。本来なら、私の方が母を気遣つてあげるべき立場なのに、まるで逆ではないか・・・。

パンとコーヒーとで、軽い朝食をとつた。母は繰り返し、水の出ないことを詫びている。内心は、母への感謝の気持ちで一杯なのに、口をついて出でてきたのは裏腹な言葉だった。

「お母さん、あんな重たい布団を運ぶなんて危ないわよ。転んだら大変だわ」

窓越しに、真っ白く霜の降りた冬景色が広がる。この時季一番の冷え込みが招いたハピニングだったが、

私の胸中は温かく潤つていた。何歳になつても変わることのない親心に。

白髪

吉田園子

一週間もすると静かにニヨキニヨキ顔を上げてくる。

横目で舌打ちしながら、ううくん、もう少し……。鏡の前で分け目を押さえてみる。十日もすると、くつきりと横一直線に列をそろえて行進するかのごとく伸びてくる。

雨が降ろうが、雪が降ろうが、灼熱の太陽の下で汗まみれになろうが、季節など関係ない。友人の一言で落ち込んだり、習い始めた英語はチンパンカンパンだたり、心は浮いたり沈んだりの精神も関係ない。

私の場合は、二週間持たない。

七十歳にもなって、当然の白髪。が、まだ現役で他人さまに見られる仕事をしている。それで意識しているのだ。

すべてが時を重ねて衰えていく中で、年々勢いを増してくるのは白髪だけだ。コンクリートで打ち固めて少しの隙間に雑草は生え伸びてくる。白髪と雑草とたくましい二つの力にあやかりたいものだ。

髪の毛の多い私は子供の頃「バカの大ガツソウ」と、からかわれた。要するに、髪の毛が多く頭は大きいが、中身は空っぽという意味である。

年頃になってパークなどかけようものなら美容院から帰る時はまとまっているが、一晩寝て起きるとヤマアラシのごとく髪の毛は大きく広がっている。すぐにモーツアルトやベートーヴェンになつた。

今はカットが進歩し、何とか毛先が治まるようになつた。が、毛先は良い。毛の根本、生え際が問題なのだ。一週間、十日も過ぎると「また 美容院に行くの?」という夫の言葉など無視して駆け出さねばならない。

二歳年上の夫の頭は剥げて頭上を数本の白髪が泳いでいる。私の髪の毛を少しあげたい位だ。

あの日、予約の時間に遅れる!と、真夏の正午、自転車で暴走していた。舗道に上がろうとした瞬間、タイヤはふにやりと段差にからまつた。「ヒヤツー!」悲鳴を上げながら起き上ろうとするとポタリ。ポタリ血が落ちる。右手小指の下がぽつかり深い傷で口を開けている。頬も痛い。左手も痛い。

明日から、高知の仕事がある。白髪を染めないで行くわけにはいかない。

ヨタヨタと美容院にたどり着いた私を迎えたスタッフはア然としている。顔に氷を当て手の傷をティッシュで押え、とにかく一時間三十分白髪を染めた。

病院に行くと、左親指骨折、右手は五針も縫い、右頬には大きなバンソウコウがはられた。白髪をかくして若ぶるどころか、あられもない姿だ。どんなに見かけを若くしても老いてきている体は、何かあるとボロボロ出てくる。

「ゆつくり、気をつけて!」をうるさい程さやかれながら、階段も何もかも急に慎重になつた。ゆつくり……と自分で自分に言い聞かせながら——それでも、十日もすると白髪は元気に出でてくる。

森のセラピー

長島 恵美子

「今日の体調は如何ですか？」

A先生の一人ひとりへの問い合わせから、ヨガのレッスンは始まる。「梅雨時は気分も減入りがちですから、今日は逆立ちをしてみましょう」まだ先生の補助付きだが、逆立ちのポーズで瞑想した後は、どこかにタイムスリップしてきたかのような心地良さが得られる。聞こえるのは、夏鶯の他、複数の鳥の声だけ。車の音を三分さえぎるというは、我が家にいては難しい。降り出したようだ。雨の音がこんなに落ち着く音だつたとは初めて気がついた。目を開けると、外のテラスで雀たちが雨宿りをして遊んでいる。頭立ちポーズの逆立ちから見る雀とは、目線の高さが同じだ。こんなに愛らしい姿形だつたのかと気がつく。窓一杯に山の緑がパノラマのように広がる。肩立ちや頭立ちを含め、逆立ちポーズを指導する教室は少ないと聞き、やはり、A先生の指南を仰いで正解だつたと思う。やればできるじやないのと、ほくそ笑む。ヨガは気付きと言つが、その第一歩だつたかもしれない。

鉄棒の逆上がりは出来ない。ドッヂボールではボールが受け取れないので逃げてばかり。運動の何が楽しいのかわからない。子供の頃から運動オーナーの運動嫌いで、肩こり歴は四十年余という大ベテランの私。一念発起して始めたのが、「ヨガ」である。初めは、市街地でA先生が講師を務められていた「五十代からのヨガ」を、一年半ほど受講した。

A先生の実家の近くの、ここ山あいの別教室に体験に来た日も、梅雨空が広がっていた。葡萄畑を曲がると、高台の建物から、手を振つてくださる先生が見える。昔、通われた小学校の分校の建物らしい。眼下に岡山市の貸農園が広がり、旭川の向こうに津山線が見える。ヨガをするには絶好の、緑に囲まれたロケーションだ。かつて、自転車で通つた中学校区の端に、このような長閑な地区があつたとは知らなかつた。先生は、私が中学校を卒業した年の生まれで同窓生だ。春の山桜も楽しみに、片道十四キロ、車で二十分ほどかかる教室に移籍して、一年になる。

「〇〇さんは、逆転のポーズがお得意ですね。この中級レベルの内容がちょうどいいですよ」これまで運動面で誉められたことは皆無だ。教室では毎回、元気分けていただく。

間と終わりに、休息のポーズが入る。深い呼吸。ラベンダーの香りの目枕。全身の緊張がほどけ、ヨガのひと時が心地よく彩られる。どれだけ体が曲がるか、ねじれるかが問われているわけではない。それが、私をヨガに惹きつける魅力である。

レッスンの日は、身体の隅々まで酸素を取り入れ、リセットされたような感じだ。そして、深い、深い眠りに誘われる。ヨガは、運動不足解消に加え、目下、森のセラピーである。

おむすび

早川浩美

「今朝はむすびかな」

義母がうれしそうに言つた。

卒寿の義母は体に悪いところはないが歯が悪い。ご飯はいつも特別に柔らかく炊いたものを出している。おむすびは中途半端に残つたご飯にワカメのふりかけを合わせただけのもの。義母用に作つたわけではない。固いかもしれない。飲み込みにくいかもしれない。

私の心配をよそに義母は、「ちょっと大きいわあ。全部食べきれるかしら」と言いながら、ペロリと食べてしまった。

そんなに喜ぶならと、翌日も、やわらかいご飯に加えておむすびを用意した。義母は迷わずおむすびを選んだ。そして、義母の朝食におむすびを用意するようになった。

毎日同じではあきるかもしれない。おむすびにも変化をつけてみる。今朝は韓国風おむすび。牛そぼろときんぴらごぼうを白いご飯に埋めてにぎつた。これは以前、娘が作つてくれた韓国風海苔巻きを義母の口に合うようにアレンジした。

義母はお箸でくずしながらおむすびを食べる。中から自分の好きなものが出でたらうれしいだろう。一日の始まりが楽しければ、その日一日が楽しく過ごせるのではないか。そんなことを思いながら作つた。ふと、地区の行事の時のことと思い出した。

その日、昼を過ぎても作業に当たる人のためにおむすびを作つてほしいと、地区役員さんから言われた。来年からはコンビニのおむすびを用意するから、と。若い人が「コンビニおむすびがいいわ。誰が作つたかわからんおむすびなんか気持ち悪いよなあ」と言つた。

その言葉に驚いた。食の安全や衛生を学んで大きくなつた世代はそうなのかと、寂しい気がした。

おむすびは誰かの手で握る。その手はその人の体と心とにつながつてゐる。「元気を出して」と、相手を思いやる気持ちは手からおむすびに。おむすびを食べる人はその気持ちも一緒に食べる。だから、誰かの優しい気持ちが感じられるおむすびはおいしい。では、感じられるものがない時はどうだろう。衛生面ばかりが気になつて気味悪さを感じるのではないか。そうだ、だから彼女の口から「気持ち悪い」という言葉が出たのだ。

気持ちのないおむすびを彼女は作りたくなかったのだろう。あれは、食べる側の立場に立つての言葉だったのだ。まだ小さな子のいる彼女には、きっとおむすびに特別の思いがあつたのだろう。それが証拠に彼女が握つたおむすびは年上の私たちみんなが感心するほどきれいな三角の形をしていた。時に私もささくれた気持ちのままおむすびを作る。義母はきっと気づいている。それでも、いつと変わらずうれしそうに食べる。いつの間にか私の心は優しいもので満たされていく。食べる側の義母の優しい思いやりだ。

明日も義母が喜んでくれるおむすびを作ろう。握る指には感謝を込めて。